

「ネーションを越えて」(その1)

浅野慎一 (神戸大学)

序. 本講の課題と目的

課題：日本を主な対象として、「nation (国家・国民・民族)」の歴史・現状・未来について考察。

①「あなたは何人?」。両親(血統)、出身・居住地、国籍、主言語

※ 神戸新聞『随想』：「日本人とはだれか?」。

<http://www.dignity-reconciliation.jp/pdf/d29.pdf>

②「『nation (国家・国民・民族)』はいつまで続く?」。

1) 20世紀中葉以前：帝国主義・植民地支配。

国民主権・民族解放 (= 民主的な国民国家) の実現：重要な政治的課題・「正義」・「夢」。
= 1960年代までに実現。

BUT 人類は幸福か?

ex) グローバルな経済格差・自然環境破壊の進展。

独立した旧植民地地域：経済的混乱・貧困・内戦・政治的独裁、移民・難民・出稼ぎ流出。

旧帝国主義国：「自国中心主義」(国益ファースト・国益最大化=国民主権)。

覇権争い、極右民族主義の台頭、「国民」の分裂・分断。

多様な社会的疎外：国民の権利としての学校教育：学歴社会・いじめ・不登校・体罰。

男女平等・個人の尊厳に基づく家族：望まざる非婚化・少子化・老後不安。

国民主権：投票率低下、政治的無関心(諦観)。

民主的労働法制：ブラック企業、ワーキングプア、非正規雇用、過労死。

国民主権の国民国家、国際秩序：課題解決能力・実質的機能・統治能力・信頼を希薄化。

2) 国民主権と基本的人権：両立可能?

国民主権：非国民(他国籍者)を主権から排除する排他的権利。

基本的人権：国籍を問わず、人が人である限りもつ普遍的権利。

「国民(民族・nation)」≠人類・人間・個人。

ex) 個々人の利益より「国益(国民益)」を優先。戦争・環境破壊etc.。

「国民」：時には「国益」のために何の恨みもない個人の命を奪い、自らの命をも投げ出す。

「nation(国家・国民・民族)」：人権同様、どこにも実在せず「心の中のみ存在」。幻想・「神話」。

「心の中のネーション」の在り方：現実の社会の構造変動と密接に関連。

「社会的編成と国家は、いつでも特定の諸個人の生活過程から生じる」(マルクス・エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」)

「一人の人間の生活と、一つの社会の歴史とは、両者をともに理解することなしには、そのどちらの一つも理解することができない」(ミルズ『社会学的想像力』)

3) 現代：「nation(国家・国民・民族)」をめぐる人類史的転換期。

国民主権・民族解放を乗り越えた新たな社会の模索。(=ポスト・コロニアリズム)。

(≠没歴史的・既存社会と調和的・個人主義的な「世界市民」「グローバル人材」「多文化共生」etc.)

既存の世界社会の歴史的な矛盾を直視、その批判・克服、社会構造そのもののラディカルな変革。

日本・日本人を素材として、ポスト・コロニアルの新たな社会像 & その主体を模索。

I. 「単一民族神話」の幻想と現実

日本：「単一民族神話」・・・2つの含意

①「単一民族」：幻想・「神話」にすぎない。

ex) 日本国民：アイヌ系、多様な「帰化」者。多民族。

在日外国人：日本経済・日本社会の不可欠の担い手。

「多民族社会・日本」。

②「単一民族」：「単一民族」を前提にする社会システム(制度・慣習)が現存。生きた「神話」。

1) 移民

a) 移民国家：北米・南米・オセアニア等、「新大陸」。

「移民=将来の国民」として正式に受け入れる制度。

多民族共生：当然の前提 or 目指すべき目標。（≠「単一民族神話」）

* 「共生」：片利共生、露骨な差別・不平等（& それへの批判）を含む。

国籍：出生地主義。 国民統合：地域的領域・政治的理念・法的国籍の共有。

「国民 (nation)」≠「人種・民族 (race・ethnicity)」。

b) 非移民国家：欧州・アジア等、「旧大陸」(BUT 多様)。日本：典型的な非移民国家。

「移民」受け入れ制度なし。 国籍：血統主義。 国民統合：血統・固有の民族文化(言語等)。

「国民 (nation)」≠「民族 (nation)」。

「単一民族神話」が実質的機能：同調圧力・同化強制。

2) 外国人出稼ぎ労働者：日独比較

日本・ドイツ：敗戦国。1950～70年代、高度経済成長の「優等生」（＝輸出主導型製造業の躍進）。

a) ドイツ：1950～70年代、外国人労働者(トルコ人)を政策的導入。低賃金労働力として活用。

1974年頃、総労働人口の1割以上。「出稼ぎ(≠定住型の移民)」に限定。

BUT 実際には定住・家族呼び寄せ。事実上の「移民」化。

1970年代後半、高度経済成長終焉、経済不況。

外国人労働者の移入制限、帰国促進政策に転換。

BUT 実際には新規移入、非帰国・定住が継続。

←ドイツとトルコの経済格差、不況ほど低賃金労働力が不可欠。

事実上の移民化：ドイツ生まれの二世・三世。

1990年代、「新外国人法」制定。

「一回限り・最終的」措置として定住外国人の法的地位強化、社会的統合。

以後も、外国人労働者の国内定住、社会的「統合」政策。

* 社会的「統合」(多文化共生。≠同化強制)：独仏比較

フランス：外国人(マグレブ人)移民・出稼ぎの双方を大量に受け入れ。

自由・平等・博愛・人権＝普遍的価値。

∴ 公共的領域：普遍的価値を貫徹。

移民側の反発(ヨーロッパ中心主義、フランス帝国主義の歴史隠蔽。

フランスの固有の文化の押し付け・「同化強制」)。

ドイツ：ムスリムの習慣：公的領域への持ち込みにも「寛容」。

国内にトルコ・ムスリム文化圏：世代的再生産。

外国人受け入れの主な目的：低賃金労働力の確保。(フランスも同じ)

∴ 新来住・国内出身(二世・三世等)の外国人：劣悪な労働条件、低い社会的地位。

∴ 移民側(特に二世・三世)の反発。差別の世代的再生産。

普遍的価値による「同化」 & 異質性を認めた「統合」：ともに矛盾激化。

∴ 文化・価値観の問題ではなく、経済・社会的な階級・階層・格差の問題！。

∴ 経済不況・失業増加→人種・民族・宗教対立の激化。

特に受入側国民・下層階級の反発(「仕事を奪う移民・外国人!」)

→極右民族主義の台頭、ヘイトアクションの激化、社会の分裂。

b) 日本：1950～70年代、新たな外国人労働者をほとんど受け入れず。

国内農村人口の都市への流動化。低賃金労働力を確保。

「島国」単位の「純粋培養型」労働市場。

「単一民族神話」の形成。

1980年代後半以降(高度経済成長終焉後)、極めて限定的に外国人労働者を政策的導入。

ex) 期間・職種等限定の技能実習生、留学生のアルバイト等。

「皆、同じ日本人」(固有の日本文化を前提とした同調圧力・同化強制)。

* 「日本：島国だから、古来から同質性高く、単一民族神話」？

NO! 1) 「単一民族神話」：戦後高度経済成長期の新たな特徴。

戦前の日本：アジアに広がる多民族帝国。(≠島国・単一民族)

2) 世界の「島国」：多くが多民族国家。